

インターバンクの声（2015年9月16日）

昨日の昼過ぎ、日銀から追加緩和の実施の声が聞かれなかったことに驚きはなかったはずだが、上海株の下落が想定以上に急激だったこともあって、仲値過ぎからの円買いの勢いがさらに強まってしまった。ロンドン市場が参入し始めた頃には119円台の中盤も割り込み、17日の米連邦公開市場委員会（FOMC）を控え市場参加者も少ないと言われながら結構商いも出来ているようにも感じられた。このまま米小売売上高が弱い発表にでもなれば一週間ぶりに118円台へ突入かとも思われたが、どうにか小売の消費部分に底固さが確認されたことや、その後のニューヨーク株式の反発もあって足許ニュートラルと思える120円台中盤に戻してきた。昨夜の海外市場の動きから、今日さらに上海株が下落となった場合にもう一度ドル売りを仕掛けられるかの判断は難しくなったところだが、テレビを中心に世の中のメディアはこぞって“中国バブル崩壊”を材料にした番組や記事のオンパレードだ。確かに世界の工場たる低い人件費を背景にした成長は鈍り、個人投資家を中心にした株式投資による損失など悪い材料ばかり目立つが、こうした面は10数億人もいる人口の中でのほんの断片の現象だと思えば、過剰に中国の経済危機を意識するのは間違っているかも知れない。注目の米FOMCが済んだあと、習近平主席の訪米で予想外のニュースでも飛び込んでくれれば相場も様変わりするはずだ。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。